



Title	森とカーニヴァルの世界 : ホーソーンの”The May-pole of Merry Mount”論
Author(s)	松阪, 仁伺
Citation	Osaka Literary Review. 1982, 21, p. 88-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25584
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森とカーニヴァルの世界

—ホーソーンの “The May-pole of Merry Mount” 論

松 阪 仁 伺

— 1 —

“The May-pole of Merry Mount” は色々な視点から考察することが可能なようである。ほとんどの批評家が一致して認めている点は、この作品が一種のアレゴリーであることである。つまり、メリイ・マウントと清教徒ととの鋭い対立の背後にホーソーン (Nathaniel Hawthorne) は普遍的な、観念的といってもよいレヴェルの対立を潜ませているのである。そこで、Michael Davitt Bell によればこの作品は “a psychological fable” であり、*“an allegory of the opposition of heart and head, of unbridled sensuality and iron repression”*¹⁾ということになる。Hyatt H. Waggoner によればその対立は、*“the “natural” sexuality of Merrymounters”* 対 *“the stern repression of the Puritans”* である。²⁾ やはりこの作品をアレゴリーと見做した Richard Harter Fogle の指摘によれば、この両者はイメージの面においてもくっきりと対照させられている。以下 Fogle によると、メリイ・マウントの象徴が ‘May-pole’ であれば清教徒のそれは *“the whipping post”* である。メリイ・マウントが「光」であれば、清教徒は「闇」である。以下省略するが、確かにホーソーンは意識的にこの両者をイメージの細部におけるまで対立させているようである。³⁾ 重要なことはホーソーンがメリイ・マウントと清教徒のどちらの立場をも全面的に支持していないことである。しかし、何らかの調和が、メリイ・マウントから清教徒社会に移る エドガー とエディス の姿に意図されていると考える批評家も多い。

以上の点を認めながらも、この作品が又、別の視点から解釈されうる可

能性を指摘する批評家も多い。例えば前述の Bell はこの作品は “psychological” であり、かつ “historical” であると考え。Bell によればメリイ・マウントと清教徒の対立は、“two possible New World futures — one an effort to hold to old ways, and the other to strike out in new, independent directions.”⁴⁾の間の争いとなる。ある意味では、メリイ・マウントは旧世界を、清教徒は新世界を代表していると言える。そしてこの作品を “the repudiation of England to establish an American character”⁵⁾を描いたものとする。似たような指摘は Q. D. Leavis によってもなされている。⁶⁾

さらには、John B. Vickery は Sir James G. Fraser 流の anthropology の見地からこの作品を分析して、この作品のテーマは “the logic of religious evolution, the development of the religious impulse from phallic cults to Christianity.” であると断定する。⁷⁾

以上、この作品に対する代表的な解釈をいくつか羅列した。本論においては以上とは少し異なる視点からこの作品を考えたい、つまり、Daniel Hoffman と同様に、⁸⁾この作品をホーソーンの現代における「楽園喪失」の物語ととらえたい。*The Marble Faun* が少なくとも主人公 Donatello を中心に見た時には、「楽園喪失」の神話が下敷になっているのと同じ意味において、“The May-pole of Merry Mount” は一種の「楽園喪失」の物語なのである。少なくともそういう解釈は可能だと思われる。メリイ・マウントの人々は現代において「楽園」を希求する人々である。ホーソーンはメリイ・マウントの人々に、“people of the Golden Age” と呼びかけるし、又、Hoffman によれば、“They are in perfect sympathy with Nature, and Nature with them.”⁹⁾なのであり、“They are living as though in the Golden Age, when time was not, or before time was,”¹⁰⁾なのである。そして、この「楽園」におけるアダムとイブは “the Lord and Lady of the May” であるエドガー とエディス である。

本論のねらいはこの作品を現代版のアダムとイブの物語ととらえ、この見地から現代の「楽園」たるメリイ・マウントの世界を考察し、さらにエ

ディスとエドガーの描く軌跡を追求することである。なお、この作品をこの視角から追求する時に清教徒の側は直接の考慮の対象にならないため、それへの言及は必要な場合だけにとどめる。

— 2 —

まず何よりもある Midsummer Eve にメリイ・マウントで催される五月祭の様子を覗いてみよう。ここでは“the Lord and Lady of the May”であるエドガーとエディスの結婚がとりおこなわれようとしているし、昔ながらの風習通りに五月柱をめぐっての輪舞が見られる。この結婚は Daniel Hoffman の指摘する通り、“both a personal and a ritual wedlock”¹¹⁾である。五月祭は古く樹木崇拝の儀式に起源を持ち、二人の結婚と、古代の儀式における儀礼的な結婚とのつながりを全く否定しきることはできない。この結婚は遠く昔には春の生命力の爆発を祈願するための呪術であったらしい。¹²⁾ 無論、このメリイ・マウントの五月祭の中に儀式的、呪術的な意味を深く読みこむことはあやまりであろうが、以下考察するように、この五月祭も根源的な生命力といったものに関与していることは否定できないように思われる。

この五月祭が「森」の中におかれていることは重大な意味を持っていると思われる。「森」は単なる背景ではなく、象徴的な意味を荷っているのである。エドガーとエディスの結婚を司る“an English priest”が“merely, all day long, have the woods echoed to your mirth.”¹³⁾とメリイ・マウントの人々に呼びかける時に、この森は人々の“mirth”に敏感に感應し、その喜びと一体となっている。人々は野性の森に象徴される、何らの人為的な規制のない自然の喜びにいたっている。それはあらゆる桎梏から解放された野性の自然と一体となる喜びであろう。森と五月祭の世界は切り離せぬものととらえられているが、本来のイギリスの五月祭は新世界の原始の自然の中におかれることにより少しその性格を変えているようである。やはり同じ“an English priest”が、“Come; a chorus now, rich

with the old mirth of Merry England, and the wilder glee of this fresh forest....”¹⁴⁾ と言う時にその事情が明らかになる。ここで人々の喜びは二重のものととらえられている。昔ながらの“mirth”にアメリカの原始の森の“glee”がつけ加わった形になっている。言いかえれば、ここでは五月祭はアメリカの“wilder”な自然の中におかれることにより、その自然に呼応していると言っても過言ではなからう。これはすぐ後で考察する仮装者の姿にも反映されているように思われる。ともかくも、人々の祝祭の喜びは、森の自然と不可分の関係にあることは確かである。

森の中で人々は慣習通りに五月柱の囲りで輪舞を楽しむ。その仮装の姿に見られるのは、特定はしがたいが、旧世界的なものと新世界的なものの混交である。まず、“stag”, “wolf”, “he-goat”, “Salvage Man”, “green men”, “morrice-dancers”, “glee maidens”などの姿が見える。ホーソーンはこの作品を書く時に、Joseph Strutt の *The Sports and Pastimes of the People of England* を参照したが、¹⁵⁾ 小山敏三郎氏の 詳細な注の中には、上記の仮装を描く時に、ホーソーンが参考にしたであろう Strutt の本の図版があげられている。¹⁶⁾ それによると上記の七つのもののうち前の四者はその図版に基づいているらしい。残りのものについてもこれらは旧世界の祝祭に固有のものである。さらには 奇怪な仮面や道化帽 (“fools-caps”)をつけた人々も見うけられる。この二つも祝祭の気ままな仮装と見なせよう。以上の仮装はいずれもメリイ・マウントの人々がイギリスから持ちこんで来たものと言えるかも知れない。しかし、ホーソーンはアメリカの原始の森を考慮して、土着の要素をつけ加えることを忘れない。“Indian Hunter”の姿や、“a real bear of the dark forest”はアメリカの荒野に固有のものであろう。そして大体においてであるが、人々の仮装の姿には森の荒々しい自然が投影されていると言えるのではなからうか。

この森の祝祭の世界には、しかしながら、もう一枚の絵がすけて見える。この世界は同時にディオニュソス(Dionysus)的陶醉の世界でもあるらしいのだ。つまり、ここにおける歌や音楽や踊り、あるいは “an English pri-

est” が “the very Comus of the crew” とされ, “a chaplet of the native vine leaves”をつけているのはすべてそのことを思わせる。Comus の父はディオニュソスであり, “vine” がディオニュソスときわめて縁の深い植物であることはほとんどことわる必要もない程のことである。さらに次の様に, 人々は Comus の “crew” にたとえられる。

Had a wanderer, bewildered in the melancholy forest, heard their mirth, and stolen a half-affrighted glance, he might have fancied them the crew of Comus, some already transformed to brutes, some midway between man and beast, and the others rioting in the flow of tipsey jollity that foreran the change.¹⁷⁾

ここでホーソーンは我々が追求してきたものを明瞭な形で見せてくれる。森の中の世界は固定した静的な相ではなく, 動的な相のもとにとらえられている。生成の場であり, 一口で言えばディオニュソスの陶醉の中での人間が野性の自然へと変貌する瞬間である。¹⁸⁾ あるいは人々が文明という衣をそっくり脱ぎ捨てて, おさえられてきた自然の生命の中へ回帰する瞬間であるとも言える。その自然とは無論森の自然に他ならない。

以上がある Midsummer Eve に メリイ・マウントで催された五月祭であるが, 重要なことはこの森の世界が メリイ・マウントのすべてを一瞬に凝縮したものであることである。一年のあらゆる変化を通じて人々の “May-pole” に対する気持は変わることなく, 人々は少なくとも月に一回はそれをめぐって踊った。

あるいはメリイ・マウントは “a perpetual carnival” であるとも言われる。そこでは五月祭のうきうきしたお祭り気分が変わらず人々を支配している。祝祭の気分は人々のエートスとでも言うべきものにまで高められていると言えそうだ。

But what chiefly characterized the colonists of Merry Mount, was their veneration for the May-Pole. It has made their true history a

poet's tale. Spring decked the hallowed emblem with young blossoms and fresh green boughs ; Summer brought roses of the deepest blush, and the perfected foliage of the forest ; Autumn enriched it with that red and yellow gorgeousness, which converts each wild-wood leaf into a painted flower ; and Winter silvered it with sleet, and hung it round with icicles, till it flashed in the cold sunshine, itself a frozen sunbeam. Thus each alternate season did homage to the May-Pole, and paid it a tribute of its own richest splendor. Its votaries danced round it, once, at least, in every month ; sometimes they called it their religion, or their altar ; but always, it was the banner-staff of Merry Mount.¹⁹⁾

メリイ・マウントの性格がこう規定された時、次の問題は人類の劫初に関する神話との関係である。これについては、まず、ホーソーンの他の作品から二箇所引用することから話を始めたい。五月祭に限らず、一般的に祝祭あるいはカーニヴァルの空間はホーソーンにとって特別の意味を持っているらしい。その非日常的空間は、わが国の「け」の日にたいする「はれ」に相当するのであろうが、ホーソーンはその世界の中に一つのユートピアを夢見ているようである。ともあれ参考のために次の二つの引用を試みよう。

The children have come from their schools, and the grown people from their workshops and their fields, on purpose to be happy. For, to-day, a new man is beginning to rule over them ; and so — as has been the custom of mankind ever since a nation was first gathered — they make merry and rejoice ; as if *a good and golden year* were at length to pass over the poor old world !”

It was as Hester said, in regard to the unwonted jollity that brightened the faces of the people. ²⁰⁾ (italics mine.)

No doubt, however, the worn-out festival is still new to the youthful and light-hearted, who make the worn-out world itself as fresh as Adam found it, on his first forenoon in Paradise. It may be only

Age and Care that chill the life out of its grotesque and airy riot, with the impertinence of their cold criticism. 21)

20) の引用は *The Scarlet Letter* からであり、文章の中に明示されているように Hester の言葉である。この日は新しい知事が就任する “public holiday” である。“a good and golden year” は「黄金時代」的な意味を含んでいるようである。これは「時」がサイクルを描き、「鉄」の時代がようやくにおわり、新たに「黄金」の時が始まる瞬間ととらえられている。

21) の引用は *The Marble Faun* の最後のローマのカーニヴァルの場面からであり、ホーソーン自身のコメントである。21) では “to the youthful and light-hearted” という限定はつくものの、いずれにおいてもカーニヴァルの空間は世界が一瞬にして若がえり人類の始源に帰る瞬間ととらえられている。ホーソーンはカーニヴァルの世界の中に、人類の最初にあったとされる幸福きわまりない世界の蘇りを見ているのである。無論、カーニヴァルは本来神話の世界とは無縁のものであり、それを神話と結びつけるところにホーソーン独自の感性が感じられる。22) そして “The May-pole of Merry Mount” においては、ホーソーンは “a perpetual carnival” であるメリイ・マウントを意識的に、「神話」風に構築しているように思われるのである。

先に見た通り人々は森の自然と一体となって生きているのであり、又ある意味ではいまだ時のない永遠の春の世界に住んでいるとも言えそうである。

But May, or her mirthful spirit, dwelt all the year round at Merry Mount, sporting with the Summer months, and revelling with Autumn, and basking in the glow of Winter's fireside. Through a world of toil and care, she flitted with a dreamlike smile, and came hither to find a home among the lightsome hearts of Merry Mount. 23)

確かに現実の時間は四季をめぐって動いているのであるが、人々の心を

支配している時間意識は変わらず「春」(“May”)であるからである。

— 3 —

確かにメリイ・マウントはこの現実の世界における一種の「樂園」と言えそうだが、そのことはメリイ・マウントが完全無欠なるユートピア世界であることを意味するわけではない。エデンの園には、イブを誘惑するあの「蛇」が忍び込むように、人々の喜びを分かちあった森も一面においては、*Comus*の森がそうであるように、²⁴⁾人を惑わせる迷宮の側面を具えていると言えそうである。随分前のことで恐縮であるが、17)の引用の“Had a wanderer, bewildered in the melancholy forest.”はそのことを思わせる。特に“a wanderer”は *Comus* の森に迷い込んだ“Lady”を思い起こさせる。この作品においては、一章で述べた如く、「光」はメリイ・マウントに、「闇」は清教徒に帰せられるのであるが、メリイ・マウントの森も何か暗いかわいらしい面を持つのではないかと思えてくるのである。同じことであるが、人々の様子を、コーマスとその仲間たちにととえることに、ホーソーンのいささかの非難の調子を感じることができる。森の場面が、二章で述べたようにメリイ・マウントの縮図であれば、これから検討するホーソーンのメリイ・マウントに対する批判は、以上のことと連動しているのかも知れない。以下エドガーとエディスの動きを中心に考察してみよう。

ある *Midsummer Eve* に “the Lord and Lady of the May” たるエドガーとエディスはまさに結婚しようとしている。それはエドガーの言葉によれば “our golden time” であり、彼らは “partners for the dance of life” になるはずであった。ところがエディスには、人々の姿が “visionary” に、その “mirth” は “unreal” に見えてしかたがないのである。この時に二人はすでにメリイ・マウントの住人ではなくなっているのである。

Alas, for the young lovers! No sooner had their hearts glowed with

real passion, then they were sensible of something vague and unsubstantial in their former pleasures, and felt a dreary presentiment of inevitable change. From the moment that they truly loved, they had subjected themselves to earth's doom of care, and sorrow, and troubled joy, and had no more a home at Merry Mount. 25)

“care, and sorrow, and troubled joy”は正にこの現実の世界の実態に他ならない。メリイ・マウントの世界は確かに時のない「楽園」である。彼らにとって不幸なことは、この世はやはり四季のめぐる世界であり、自然が人間の望むままに食物をさし出す世界ではないことである。人々は「死」という厳粛なる事実からも眼をそむけようとする。このことはとりもなおさずそこが、「エデンの園」と同じく、ある意味において「死」のない世界であることを意味するのであるが、ホーソーンは、“Once, it is said, they were seen following a flower-decked corpse, with merriment and festive music, to his grave.”と語り、続けて、“But did the dead man laugh?”²⁶⁾と意義深い皮肉な質問を投げつける。メリイ・マウントの世界は美しいものであるにしても、それは現実を無視した砂上の楼閣にすぎないようである。実際人々の行為は“a day-dream”と呼ばれている。

エドガーとエディスの二人は本当に愛しあった時から、あるいはそうすることにより、Hoffman の言葉によれば、“mutual responsibilities in a community of two, the minimal society.”²⁷⁾を負うこととなったのである。彼らは自然のままの世界の中で人間の「社会」を志向している。メリイ・マウントはやがて清教徒によってほろぼされてしまうが、エドガーとエディスの心の中ではすでにメリイ・マウントの崩壊は始まっているのである。彼らの眼はすでに時間の存在する現実の世界に向けられている。彼らはその愛により、必然的に時の流れに棹さざるを得なかったようである。

メリイ・マウントは清教徒の襲撃をうけ、「真夏の夜の夢」のごとくはかなく亡びてしまうが、その危機に立った時に二人の愛が偽りでなかったことが証明される。

There they stood, pale, downcast, and apprehensive. Yet there was an air of mutual support, and of pure affection, seeking aid and giving it, that showed them to be man and wife, with the sanction of a priest upon their love. The youth, in the peril of the moment, had dropped his gilded staff, and thrown his arm about the Lady of the May, who leaned against his breast, too lightly to burthen him, but with weight enough to express that their destinies were linked together, for good or evil. 28)

やがて二人は清教徒社会に入っていくが、それは外からの強制だけでなく、彼らの心の中にそれに呼応するものがあつたはずである。彼らが降りて行く清教徒社会は決して理想的なものではない。しかし、二人はあえてそこに生活の場を求める。

二人の結末は次のように語られる。

They returned to it no more. But, as their flowery garland was wreathed of the brightest roses that had grown there, so, in the tie that united them, were intertwined all the purest and best of their early joys. They went heavenward, supporting each other along the difficult path which it was their lot to tread, and never wasted one regretful thought on the vanities of Merry Mount. 29)

Hoffman が “The parallel to Milton’s Puritan epic of the expulsion from Eden” が “unmistakable” と言う通り、³⁰⁾ 二人の姿に「エデンの園」を去るアダムとイブの姿を重ねることは無理ではないと思われる。

彼らは自然のままの生活を捨てて、人間の社会の掟と規律に身をまかせ、Christian salvation を求めたと解される。別のレヴェルにおいてはそれはカーニヴァルの世界から日常の世界への移行とも言える。

彼らがメリイ・マウントに再び帰ることがないとしても、それはメリイ・マウントを全面的に否定することにはならない。彼らの愛はメリイ・マウントで育まれたのであり、その絆には、“early joys” がからみあっているからである。

この二人が辿った運命については Hoffman が手ぎわよくまとめている。

... what he (Hawthorne) does here dramatize is the evolution of self-knowledge in the human soul. In 'The Maypole of Merry Mount' he uses a reconstruction of an improbable historical episode to image forth a perfect objectification for the soul's progress from innocence and delight through recognition of mutability and responsibility to submission to law in order to live in the human community. The law is not perfect, the community is fallen, and though love look not back to its origins it yet bears up to heaven itself the garland that was grown in the 'fresh forest.' The Lord and Lady of May are much nearer grace than ironclad Endicott, for they never cast out of their souls their kinship with Nature, their capacity to love.

The focus of 'The Maypole of Merry Mount' is then on the love of Edgar and Edith, on the fate of the Lord and Lady of May who are exiled from Paradise by the 'real passion' which makes them subject to time; exiled by the mutual responsibility which makes necessary the assumption of a moral life. ³¹⁾

注

- 1) Michael Davitt Bell, *Hawthorne: And the Historical Romance of New England* (Princeton: Princeton University Press, 1971), pp. 119-120.
- 2) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (Cambridge: Belknap Press, 1971), p. 156.
- 3) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark* (Norman: University of Oklahoma Press, 1975), pp. 60-61.
- 4) Bell, p. 123.
- 5) *Ibid.*, p. 122.
- 6) Q. D. Leavis, "Hawthorne as Poet" in *Hawthorne: A Collection of Critical Essays*, ed. A. N. Kaul, Twentieth Century Views, (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1966), pp. 25-35.
- 7) John B. Vickery, "The Golden Bough at Merry Mount," *Nineteenth-Century Fiction*, XII (Dec. 1957), pp. 203-214.

- 8) Daniel Hoffman, "'The Maypole of Merry Mount' and the Folklore of Love" in his *Form and Fable in American Fiction* (New York: Norton, 1973), pp. 126-148. Hoffman はその興味をこの点に絞りに絞っているわけではないが、Hoffman が、この作品を「楽園喪失」の物語ととらえた発言は次に述べるように散見される。
- 9) *Ibid.*, p. 129.
- 10) *Ibid.*, p. 142.
- 11) *Ibid.*, p. 128.
- 12) James George Frazer, *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*, abridged edition, (London: Macmillan, 1976), pp. 158-184.
- 13) Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales* ("Centenary Edition, IX; Columbus: Ohio State University Press, 1974), p. 57. 以下ホーソーンの作品からの引用はこの版に基づく。
- 14) *Ibid.*, p. 57.
- 15) これはこの作品の「前書き」の中でホーソーン自身が語っている。
- 16) 小山敏三郎, 『詳注ホーソーン短篇集 I』, (東京: 南雲堂, 1973), pp. 288-292.
- 17) Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 56.
- 18) 少なくともホーソーンはそう考えていたようである。*The Marble Faun* の10章で "a feast-day" に森の中で音楽と踊りのディオニュソスの世界がくりひろげられるが、その興奮の渦の中で人々が野性に変身することは, "satyrs," や "fauns" にたとえられることで明らかにされる。cf. Carl Kerényi, *Dionysos*, trans. Ralph Manheim, Bollingen Series LXV. 2, (Princeton: Princeton University Press, 1976).
- 19) Hawthorne, *Twice-Told tales*, p. 60.
- 20) Hawthorne, *The Scarlet Letter* ("Centenary Edition, I; 1962), p. 229-230.
- 21) Hawthorne, *The Marble Faun* ("Centenary Edition, IV; 1968), p. 437.
- 22) なお、つけ加えて言えば、Mikhail Bakhtin はその Rabelais 研究 (*Rabelais and His World*) の中で、中世の人間にとってカーニヴァルの世界が一つのユートピアの性格を持つという発言をしている。それは "the second life of the people, who for a time entered the utopian realm of community, freedom, equality, and abundance." (p. 9) であった。同じ趣旨の発言はあちこちに見られる。以上のことは、ホーソーンのカーニヴァルの性格を考える時、参考になると思われる。Mikhail Bakhtin, *Rabelais and His World*, trans. Helene Iswolsky, (Cambridge: M. I. T Press, 1968).
- 23) Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 54.

- 24) *Comus* の森は “the kind hospitable woods” (l. 186) という好ましい面がないことはないが、全体的には闇と “dun shades” (l. 127) がおりなす暗い “Chaos” (l. 33) であり, “desert wilderness” (l. 208) である。この森が迷宮的側面を持つことは, “this leafy labyrinth” (l. 277) という語句にあらわれており, それは “Lady” の体験が実証するように人を惑わせ, あやまちに至らせる森のように思える。行数は John Milton, *Complete Shorter Poems*, ed. John Carey, (London: Longman, 1971) による。
- 25) Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 58.
- 26) *Ibid.*, p. 61.
- 27) Hoffman, p. 143.
- 28) Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 65.
- 29) *Ibid.*, p. 67.
- 30) Hoffman, p. 132.
- 31) *Ibid.*, pp. 144-145.